

CMA+PBダブル資格者に聞く、 プライベートバンカー資格

超高齢化社会に突入した日本では、相続や事業承継といった課題に直面する富裕層・企業オーナーも多く、このような課題に取り組むプライベートバンカーの存在は、近年欠かせないものとなっています。

特に事業承継の課題への支援は、税務・法務よりも、証券アナリストの知識や感覚が最も生きる分野と言えるでしょう。事業全体の流れをつかみ、その分析やビジョンの立て方、差別化の方法、上場企業の財務諸表からリスクを読み取る識別眼、アナリストレポートで駆使される会社の意図を投資家に伝えるための表現方法など、証券アナリスト的観点や経験が、企業オーナーへのコンサルティングには欠かせません。

CMAでありかつPB資格を取得された会員の皆様にご登場いただき、受験の経緯やダブル資格の活用、また受験した感想等について、お話を伺います。

1. 受験のきっかけ

日本社会の根幹をなす中堅・中小企業の役に立ちたい

現在は独立し、業務委託の形でアナリストレポートの執筆のほか、ファミリー向けのファイナンシャルプランニングサービス、およびファミリービジネス（家業クラスの中小企業）向けのアドバイザーサービスを行っています。

以前は国内系アセットマネジメントの会社にて、アナリストとファンドマネージャーとして、10年以上日本株の運用に携わってきました。一番長く経験した中小型株の運用の時代には、数百社という企業のマネジメントの方とお会いしてきました。その経験を通じて、「中堅・中小企業の層の厚さこそが日本の社会の強さの源泉だ」ということを強く感じたものです。

また、それとは別に、日本のものづくりの産地を応援するNPOの理事として約3年お手伝いさせていただいたことがあり、地方の産地を支える家業（ファミリービジネス）についての知見を得る機会がありました。

こうした経験から、ファミリーとファミリービジネスの力を強くする役に立つ仕事をしてみたいと考えるようになり、機会があって、2013年に長く勤めた会社を辞めることになりました。

多岐にわたるお客さまの課題は、特定分野の専門性だけでは解決できない

いざファンドマネージャーの職を離れて強く実感したことがあります。ファンドマネージャーは、金融または資産運用分野の専門家ですが、特定の分野での専門性だけでは、お客さまのお役に立てないということです。お客さまが抱える課題は複雑で、その分野は多岐にわたります。場合によっては、家族の中の人間関係が課題ということもあります。また、お客さま自身が課題を明快に把握しているとは限りません。本当に解決すべき課題が別のところにあるということもあります。こうしたお客さまの課題解決に対応するには、専門性のほかに、少なくともお客さまと話ができる網羅性が必要となります。

こうした網羅性を身につけたいと考えていた時に、プライベートバンカーの資格を知り、受験をすることにしました。

2. シニアPBを受験して

筆記試験を2度受験した経験からの私見

私は直接シニアPBの試験から受験しました。ご存じの通り、3科目のコンピューター試験に通ってから筆記



オフィス・ラコルド
代表 藤野敬太氏

試験という流れです。私の場合、1回目の筆記試験は落ちてしまい、2回目で合格しましたので、2014年に2本の投資政策書を作成したことになります。そこで、複数回の筆記試験経験者の、投資政策書についての私見をご紹介します。

投資政策書に限らず、コンサルティングのビジネスで顧客に提案する時、流れとして、1. 現状、2. 理想の状態、3. 現状から理想の状態への道筋、の3点セットを顧客に示すことが多いかと思います。この流れで、筆記試験へのアプローチを考えてみることにします。

【顧客の現状】

1. の現状は、問題文に書いてあることがすべてです。最初はひとまず全文通して、2度目以降は、メモやチェックをつけながら、何度も読み込むことが肝要です。同時に、現在の自分の知識で対応できない部分の洗い出しもする必要があります。この作業には、数日費やしてもよいのではないかと思います。

【顧客にとっての理想の状態】

投資政策書に明確に記載するかはともかく、2. の理想の状態は、強く意識しながら作成することをお勧めします。現状から理想に向かう間に立ちほだかっているものが、いわゆる「顧客の抱えている課題」ですから、理想の状態がぶれると、設定する課題もぶれてしまいます。

さらに、もう一つ、顧客にとっての理想の状態を意識し続けるメリットがあります。

投資政策書を書き進めていく途中、枝葉の部分でつまずくことが多々あります。その時、「何について書いていたのか」とか、「何が言いたかったのか」が分からなくなります。いわゆる「迷子」の状態です。そのような時、投資政策書の提出先である（問題文に登場する）顧客にとっての理想の状態への意識を持ち続けていれば、「迷子」の状況から早く抜け出すことができます。

シニアPBの筆記試験は、予想以上に短い時間で投資政策書を完成させることが求められます。振り返れば、私が1回目の筆記試験で失敗したのは、重要な部分での計算間違いもあったのですが、顧客にとっての理想の状態への意識が乏しかったために、「迷子」になってしまった時に、ただでさえ短い時間を下手に費やしてしまったからだと思います。

【現状から理想への道筋】

3. の現状から理想への道筋は、対応策または解決手段のことですから、正解は一つではありません。一つの理想の状態に対して、その道筋は複数存在するからです。この部分は、知識も必要になってきます。書籍やネットを調べる、専門家に質問する、協会のセミナーに参加するなどしながら、補っていく部分です。

模擬コンサルを体験できる

投資政策書を作成する際に何度も読んだせいかもしれませんが、筆記試験の問題のストーリーは、読み込むほど味わい深くなるように思います。個人的には、模擬的にコンサルティング案件を経験させてもらったように感じています。資格そのものは、ゴールではなくスタートラインに立つためのものですので、今後さらに研鑽していきたいと思います。

3. CMAでありPB資格者である強み

専門性+網羅性で勝負できる

中小型の日本株ファンドのアナリストやファンドマネージャーをしていましたので、金融または資産運用分野の専門性はもちろんですが、1～1.5時間の限られた時間で必要な情報を得るためのスキル（投資判断に必要な情報）を得るためにどのような準備をするか、何を聞き出すか、どう話してもらうかといったスキルも、自分の一つの強みになっています。

これに加え、PB資格の学習で得た「網羅性」というキーポイントが、自分の新たな強みに加わりました。シニアPBを取得することで、全く知らないテーマというのがなくなり、多様で複雑な課題を抱えるお客さまにも自信を持って対応できるようになったと思います。